「出色の棟梁」の知恵と工夫

長崎総科大　山田　由香里教授

復元したかんなを前に「鉄川は『出色の大工棟梁』」と語る山田教授＝長崎市、長崎総合科学大

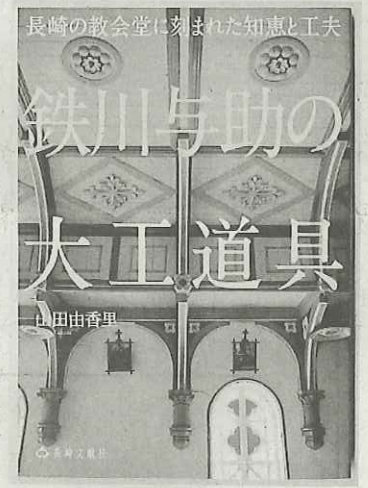
世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」にゆかりの教会をはじめ、明治時代から戦後にかけて多くの建築を手掛けた鉄川与助（1879～1976年）。長崎総合科学大の山田由香里教授（建築史）は、鉄川が教会を造るのに使った特殊なかんな12点を、実物を基に復元した学術調査結果などをまとめた「鉄川与助の大工道具」（長崎文献社刊）を出版した。道具に凝らした知恵と工夫、教会にとどまらず高品質の建物を多数残した実績から「出色の大工棟梁（とうりょう）」の姿が浮かび上がる。

「『仏教徒なのに教会をたくさん造った』という言及がよく聞かれるが、鉄川には教会も他の建物も同じ〝仕事〟に過ぎなかった」

終生仏教徒でありながら、数々の教会を手掛けた特異性が情緒的に語られがちだという。だが、山田教授が思い描く実像は、教会か否かに関係なく常に依頼主の満足する建物造りに努める姿。設計、デザインから建築まで全工程を手掛けており「建築家より『大工の棟梁』と呼ぶのがふさわしい」とこだわる。

「非凡なのは、あれだけの数を造っていながら全部が違うこと。絶えず新しい意匠を加えていき、戦後まで活躍した」と評した。

「鉄川与助の大工道具」出版



鉄川は現在の新上五島町出身。大工の棟梁の長男に生まれ、家業を手伝う中で地元の教会堂建築に従事。フランス人宣教師らの指導を受け、家業を継いで以降も教会を次々と手掛ける。大正時代に長崎市に進出。県内各地で学校や役場、寺など幅広い建築に携わり、戦後復興に貢献した。

山田教授は2008年、新上五島町で、鉄川が使ったかんなの台座の現存を知り、09～12年に調査・復元を実施。現代の道具職人たちの協力を得て、波形や丸形など特殊な刃の付いた復元品の完成にこぎ着けた。本書は原形となった当時の西洋がんなを追った海外調査や、復元後の展覧会などを含めて経緯を紹介。復元品で削った木材の形状と、鉄川が造った教会堂内の手すりや柱などを照合し、意匠がぴたりと合致するクライマックスは印象的だ。

終章は、鉄川の実像を知ってもらうため「どうしても入れたかった」という建物総覧。1906（明治39）～51（昭和26）年の工事69件を解説した。建築に関する西洋の最新デザイン集を入手し、教会堂の意匠に取り入れるなどした仕事の裏側にも迫る。「建築史の研究は、その時代の人々の知恵と工夫が見られるのが一番の醍醐味（だいごみ）」と目を輝かせた。B5判131ページ。2592円。

（山口恭祐）